
分裂

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
分裂

【Nコード】
N5715H

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
チエコスロバキア分裂。スロバキア人のエディタはチエコ人の夫ペテルと暫く距離を置く為に旅に出てこれからのことを考える。そしてその旅で出した結論は。国家、そして民族が分かれても愛は残るのではないだろうか。

第一章

分裂

分かれたのは国ではなかった。民族もだった。

かつてチェコスロバキアという国があった。しかし今その国がなくなろうとしていた。

冷戦が終わりその時にこの国も民主化されることになった。その時にだった。

「民主化になったのはいいことだ」

「もうこれでソ連の顔色を窺わなくていいんだ」

まずは市民達はこのことを喜んだ。これはチェコ人もスロバキア人も同じだった。

しかしであった。民主化と民族自決は同じものだった。何故ならソ連は多くの民族を抑圧していたからだ。その証拠にバルト三国が独立しようとしていた。

ドイツは一つになるうとしておりユーゴスラビアは分裂しようとしていた。そしてその分裂はチェコスロバキアにも及んでいたのである。

「もう一つの国になっている必要はない」

「分かれてそれぞれやっていくのだ」

分裂派は両方にいた。そうしてそれぞれ同じことを主張していた。

「我々はチェコ人だ」

「私達はスロバキア人だ」

それぞれ同じことを言っていた。

「自分達の国でやっていこう」

「自分達の国を持つのだ」

こう言って分裂をすぐに決めてしまった。チェコスロバキアはこうして二つの国になってしまった。しかし多くの者はそこに悲しさも感じていた。

「今まで一つの国だったのに」

「お互い仲良くやってきたのに」

こう思うのはそれぞれの分裂派ですら多少持っていた。チエコスロバキアはまずそれぞれの民族の融和を第一に考えて国家を運営してきた。チエコ人の大統領が出たならばスロバキア人の首相を選ぶ他にも常にお互いのことを考え合っていた。彼等はバルカンのように過去血で血を洗う凄惨な殺し合いは経てはいない。だからそれも可能だった。そうして彼等は互いのことをよく知っていた。中には夫婦になる者すらいた。そしてそれは少なくはなかった。

プラハは美しい街だ。かつてはチエコスロバキアの首都だった。この街にはあの色事師カサノヴァもいたことがあるし彼をモデルにしたと言われているモーツァルトの歌劇『ドン・ジョヴァンニ』はここで初演が行われている。そして昔ながらの美しい街並みを誇っているのだ。

東欧そのものとも言える。白い壁に赤い高い屋根を持つ家が並び窓が整然と並んでいる。通りはバランスよく続き時折美しい曲線も描いている。そうしてカトリックの寺院がこれまた鋭角の屋根を見せその上に十字架をもっている。その煉瓦の街の中を今一組の男女が歩いていった。

「ねえエディタ」

「ええ」

小柄でブロンドの透き通った顔立ちの青い瞳の美女が茶色の髪にこれまた青い目の自分より頭一つ大きいコートの若者の言葉に応えていた。

「僕達の国が」

「そうね」

二人は少し俯いて並んで歩きながら話をしていった。

「分裂。したわね」

「もうチエコスロバキアはないんだ」

青年は少しばかり沈んだ声でまた述べた。述べながらその石の路

を歩く。石畳の路を。

「これからはね」

「チエコと」

「うん。スロバキア」

二人で言った。

「エディタ。君の国籍はだから」

「そうよ。スロバキアになるわ」

エディタは青年の言葉に俯いたまま答えた。

「それでペテル、貴方は」

「チエコ人になるね。これからは」

「因果なものね。ソ連も共産主義もなくなっても」

「国家が分かれてしまうなんて」

「ドイツは一つになってけれど私達は分かれて」

「民族自決か」

ペテルはここで上を見上げた。空は白く虚ろな色の雲が完全に覆ってしまっていた。

「聞こえはいいね」

「ええ。そして理念としてもいいわ」

二人はそれは認めた。

「けれど。私達はね」

「ずっと。一緒だったからね」

「私がここに来たのはまだお母さんのお腹の中にいる頃だったわ」

エディタは前を見ていた。そこにはティーン教会が見える。二つ

の塔が並んで立つ白と暗灰色が印象的な対比を見せているこの教会はブラハの象徴の一つでもあり。彼女は今それを見ているのだ。

「それで子供の頃からずっとあの教会を見ていて」

「僕もだよ」

そしてそれはペテルも同じだったのだ。

「あの教会の塔には僕もよく登ったよ」

「そうね。私もだったわ」

彼女はこれも彼と同じだったのだ。

「そして貴方と出会って」

「よく覚えてるよ」

ペテルもまた教会に目をやってきていた。その塔のある教会をだ。

「あの時。僕達はまだ学生だったよね」

「お互い高校に入ったばかりで」

二人の出会いはその時だったのだ。

「たまたま教会のあの塔の中でぶつかってね」

「痛かったよ、少し」

ここで少し苦笑いを浮かべるペテルだった。

第二章

「あの時はね」

「御免なさい」

すぐに謝るエディタだった。

「あの時は前を見ていなくて」

「いいよ、それはね」

だがペテルはそれを笑顔でいいとするのだった。

「そんなこと。あの時だってね」

「何でもないの」

「ないよ、全然ね」

また言うのだった。

「そんなことはね。大したことじゃないから」

「そうなの」

「それよりもそれで」

そしてここで言葉を少し変えてきたのだった。

「会えたからね。君とね」

「そうね。あの塔の中でぶつかったから」

それが縁となったのである。

「私達は一緒になれたのね」

「そうだよ。それで今一緒にいるじゃない」

「ティーンズの塔の中でぶつかってそれで一緒になって」

「あの時はね。思っていたよ」

彼はまた言った。だが話の内容が変わってきていた。

「このままずっとこのままだって」

「そうね。ずっとね」

それはエディタも同じだった。

「私も。ずっと一緒だと思ってたわ」

「共産主義とかは。どうでもよかつたんだよ」

これはチェコスロバキアではそうだったことだ。この国においてはまずチェコ人とスロバキア人の融和であった。その融和がなくては共産主義も意味のないものだったのだ。

「ソ連軍が来て制圧してくれたこともあったけれど」

「少しだけ覚えてるわ」

プラハの春だ。一九六八年のことである。

「あの時のことはね」

「戦車が来てこの街を制圧して」

「お父さんもお母さんも物凄く嫌な顔をしてたよ」

「パパもママもそうだったわ」

チェコスロバキアは決死の思いで立ち上がったのだ。これはハンガリー動乱の時と同じである。なおこの時にソ連を『平和勢力』と賛美していた日本の自称知識人達がいたがその領袖の一人である大内兵衛なぞはハンガリーを『百姓国』と罵りプラハの春では沈黙していた。ソ連が平和勢力かどうかなぞそれこそ満州でわかることである。彼等はそれを覆い隠し国民を欺いていたのである。それは社会党にしろ同じである。こうしたそれこそシエークスピアも啞然としサルドウすら腰を抜かすような卑劣漢達が大手を振って公の場を闊歩し『良識派』ともてはやされていたのがソ連崩壊前の日本である。恐ろしいことにこれが現実の話なのだ。

「物凄くね」

「僕はね、確かに共産主義は嫌いだったよ」

これはペテルの本音だ。

「けれどね。それ以上にこの国が分裂するのはね」

「嫌だったのね」

「チェコ人もスロバキア人もないよ」

彼はまた言った。

「一緒にいたいんだよ。ずっとね」

「私となのね」

「民族自決、それはいいよ」

その理念自体はということだった。

「それはね。けれどこの国が分かれたら」

「パパとママだけねど」

エディタは自分の両親のことをここで話した。二人で教会の塔を見続けながら。

「スロバキアに帰るって言ってるわ」

「そう、祖国にね」

「プラハは好きだけれどそれでも祖国はそこだから
スロバキアということだった。

「だから帰るって言ってるわ。もうね」

「帰るの。お義父さんとお義母さんは」

「それで周りの人が言ってるらしいのよ」
話がここで動いた。

「私も。スロバキアに帰ったらどうかって」

「スロバキアに？ってことは」

「貴方はチェコ人じゃない」

このことは隠せないことだった。エディタがスロバキア人であるのと同じように。それはどうしても隠せない確かな事実であった。

「だから。一緒にいるのはどうかって」

「そうなの」

「私はスロバキア人」

自分でも呟くエディタだった。

「これは事実よ。隠せないわ」

「そうだね。それはね」

ペテルも頷くしかないことであった。

「けれど僕は」

「私も。けれど私は」

どうしてもなのだった。チェコとスロバキア、二人の国はそれぞれ違っている。このことはどうしても消せなく隠せない。何を出そうとも。だからこそ今この国は分裂しようとしているのだ。

「少し考えさせて」

「どうするの？考えるって」

「旅に出たいわ」

またここで俯いてしまうエディタだった。

「少しだけ。祖国を見てくるわ」

「スロバキアに行くんだね」

「一人でね。行って来るわ」

それが彼女の考えなのだった。

第三章

「その間に決めるから。待っていて」

「うん、待ってるよ」

ペテルは微笑んで彼女の言葉に頷くのだった。

「君が帰るのをね。待ってるよ」

「有り難う」

こうしてエディタは祖国に旅に出るのだった。まだ分裂していないがそれがもう決まっただけで祖国になった国の東半分に。電車で静かに向かったのだった。

「行ってらっしゃい」

「ええ」

二人が住んでいるアパートの一室を出る時に別れの言葉を交えさせた。部屋の窓から見えているプラハの景色は相変わらず美しい。しかしそこに見える色はくすんだものだった。空は暗く重い雲がたちこめていてそれが一層景色を暗く見せているかのようだった。

「祖国を見てくるわ」

「それじゃあね」

エディタは彼に別れを告げて祖国に向かった。電車はプラハを発ちそのうえでスロバキアに向かう。電車での旅は静かで落ち着いたものだ。そして車窓から見える風景は。見渡す限り緑であった。

「これがスロバキアなのね」

エディタは最初にそれを祖国だと思った。

「緑の多い国だって聞いたけれど」

進む限り窓からは森ばかりが見える。その深い緑を見てまずは微笑むことができた。

「いいわね。緑も」

彼女は木が好きだ。だからそれには抵抗がないのだった。

だからそれには抵抗がなかった。食堂車で食事を摂っている時に

丁度向かい側に座っている老婆もその緑を見て目を細めさせていた。
「いいわね、やっぱり」

眼鏡をかけたその目で言うのだった。

「この緑が。やっぱりスロバキアよ」

「これがスロバキアなんですか」

「そうよ」

老婆は彼女の言葉にも応えてきた。その声も穏やかな笑顔であった。

「これがスロバキアなのよ。緑が多くて静かな国だね」

「そうですか」

「チエコとは違うのよ」

この言葉から老婆もまたスロバキア人であるとわかる。少なくともスロバキア人であるエディタにはこれだけで充分なのだった。

「この国はね。スロバキアなのよ」

「スロバキア、ですね」

「貴女もそうね」

老婆は今度はエディタの顔を見て言ってきた。

「貴女もスロバキア人ね」

「あつ、はい」

少し戸惑ったがそれでも返事を返すことはできた。

「そうです。プラハに住んでいますけれど」

「私もそうだったわ」

老婆はこうエディタに答えてきた。

「長い間ね。あの街にいたわ」

「そうだったのですか」

「いい街ね」

彼女もそれは否定しないのだった。しかしそれでもその顔は笑ってはいなかった。

「けれどね。あそこはチエコだから」

「スロバキアではないのですね」

「私はスロバキアに生まれたのよ」

彼女はこのことを強調するようにエディタに話すのだった。

「そして一つになるまでいたのよ」

「一つになるまでにですか」

「ええ。スロバキア人だったわ」

チェコとスロバキアは二次大戦の終結までは分裂していた。しかもチェコはナチスドイツに併合されていたこともある。複雑な歴史を歩んでいる国でもあるのだ。

「その国で生きていたけれど」

「それで一つになってプラハに行かれたんですか」

「そうよ。仕事を求めてね」

それはよくある話だった。仕事を求めて街に出るのは。それは何もこの国だけのことではない。どの国でもある話なのである。何時の時代でもだ。

「プラハに出てそこで結婚して家庭を持って」

「そうだったんですか」

「それからずっとだったわ」

話す老婆の目は遠いものを見ていた。

「ずっとプラハにいたわ。何十年も」

「長かったのですね」

「けれど子供達は独立して主人も亡くなって」

語る目に悲しさも宿った。愛する者が旅立ち亡くなったことに対する目である。

「それで私だけになって」

「スロバキアにですね」

「やっぱり私はスロバキア人だから」

このことをまた話すのだった。

「スロバキアに戻るわ。そしてそこであと少しだけいるの」

「そうですか」

「この窓から見る限り変わっていないし」

実際に東ドイツでは昔ながらのドイツが残っているとされた。

こえは共産主義の経済発展の遅れのせいである。その為に昔ながらのものが強く残ったのである。

「懐かしい祖国だね。静かに余生を過ごすわ」

「それが楽しみなのですわ」

「そうよ。貴女はどうかしら」

老婆は今度はエディタに顔を向けて問うてきた。

「貴女もスロバキア人よね。どうするの？」

「私ですか」

「祖国に戻る為に来ているの？」

今度はさらに具体的に問うてきた。

「それだったらこのまま」

「私は」

俯き戸惑っていた。しかしその中でも言うのだった。

第四章

「今は旅をしています」

「旅を？」

「はい、今は」

こう言うだけであつた。

「祖国を旅しています」

「それだけなのね」

「今のところは」

俯いたうえでの言葉は迷っていた。

「そのつもりです」

「そう。けれど覚えておくといいわ」

老婆はその彼女に対して話すのだった。あくまで穏やかな声で。

「私達はスロバキア人よ」

「スロバキア人ですか」

「心はチェコにはないのよ」

このことをあえて言うのだった。

「スロバキアにあるのよ」

「スロバキアに」

「だから私はスロバキアに帰るわ」

自分のことも話すのだった。

「この国にね。帰るのよ」

「じゃあスロバキア人は」

「スロバキアに帰ってそこで生きるものよ」

これが老婆の考えであつた。

「この国でね」

「私も」

「考えるといいわ」

老婆は穏やかに彼女にそれを促すだけだった。

「よくね。じゃあ私は」

「はい？」

「次の駅で降りるわ」

「こうエディタに告げたのだった。」

「そしてそこでね。ずっと暮らすのよ」

「その場所で」

「そう、スロバキアでね」

顔も穏やかなものだった。その穏やかな顔で微笑んでの言葉であった。

「暮らすわ。懐かしい祖国でね」

「わかりました」

老婆のその言葉を静かに受け取るのだった。その言葉通り老婆は次の駅で降りた。だがエディタの旅は続きそのうえで電車の中から祖国を見続けていた。

旅は続く。しかしであった。彼女の心は楽しまなかった。

「何故かしら」

次第にそれが何故かを考えだしていた。

「どうして。祖国なのに」

心が楽しまない。そのことに気付きだしていたのだ。

それでどうしてかを考えそのうえでまた気付いた。今は一人なのだ。

「一人……」

そのことについても考えはじめた。

「そうね。私は一人だったわ」

今はいつも横にいてくれている夫がいないのだ。ペテルが。

「そうね。ペテルがいないのね」

自分の部屋の中で横を見る。部屋にいるのは一人であり当然席に座っているのは彼女だけだ。やはり他には誰もいないのである。

「私だけ。いるのは私だけ」

噛み締めるような言葉だった。

「一人になるのがこんなに」

スロバキアの美しい緑に満ちた景色を見ても良かった。その為に楽しめないのだ。彼女はこのことに気付いたのだ。

「私はスロバキア人」

このことは自覚していた。

「けれど。それでも」

そしてそれ以上に感じるのだった。

「私の横にはいつもペテルがいてくれて」

彼のことである。

「それで微笑んで支えてくれて。だからなのね」

だからこそ笑えたり楽しめたのだ。彼女は最早一人ではなかったのだ。そう、スロバキア人であってもそれ以上になのであった。

第五章

「私は。彼と」

一緒にいなければ寂しくて仕方がない、いとおしくて仕方がない。そのことが今わかったのだった。

「そうね。それだったら」

スロバキアを見続けてはいる。それでもだった。

「私のいる場所も」

答えが出たのだった。探していた答えが。

「あそこしかないのね」

答えは出た。後はそこに向かうだけだった。彼女は静かに鉄道での度が続けた。しかし途中のスロバキアの美しい景色を見て立ち止まることはなかった。そしてそこに入ることもなかった。

彼女は戻ってきたのだった。あの街に。今電車がそこに着いた。

壮麗な駅である。ただ線路の数が多いだけではない。多くの人々が行き交うその駅の中はまるで宮殿である。その赤がかった光の中を多くの人々が出会いと別れ、来訪と去来をそれぞれ見せている。彼女は今その駅に戻ってきたのであった。

「おかえりなさい」

「はい」

まずは電車から降りて出迎えの女性の勤務員に笑顔で応える。それは見事なチェコ語だった。しかもプラハ訛りが見られるものだった。

ややアーチになった天井からは太陽の光が差し込んでいる。その光を浴びながら駅のホームに降りると。そこに彼がもういた。

「待ってたよ」

「来てくれたのね」

「言ってたじゃない」

ペテルは微笑んで彼女に言ってきた。

「待つてるって。ここだね」

「そうだったわね」

そして彼女も夫のその言葉を受けて微笑んだのだった。

「確かにね。言ってたわね」

「それでどうするの？」

彼は今度は妻の顔をじっと見てそのうえで尋ねてきた。

「これから。どうするの？」

「ええ、それはね」

エディタは微笑んで彼の問いに答えてきた。

「もう決めてあるわ」

「そうなんだ。もう」

「決めてるわ。それはね」

一呼吸置いてそのうえで出した言葉は。

「私はスロバキア人よ」

まずはこう言った。

「それでも。貴方とずっと一緒にいたいわ」

「それでいいんだね」

「何処にいても。私は一人ではいられないから」

一人旅でそれがわかったのだ。祖国を旅して。

「だから。私はずっとここに」

「わかったよ。それが君の出してくれた答えなんだね」

ペテルは彼女のその言葉を微笑みで受けるのだった。

「じゃあ僕はそれで」

「いいのね」

「悪い筈がないじゃない」

ペテルにすればまさにそれしかなかった。他には考えられなかつ

た。

「僕も。一人でいたら寂しくて仕方がなかったよ」

「そうよね。私達は二人でないと」

それがわかったのはエディタだけではなかったのだった。ペテル

もだった。

「一人でいたらこの街にいてもだったのね」
「色褪せて。どうしようもなかったよ」

彼もまたエディタと同じものを感じていたのだった。この街の中で。

同じものを感じたならば出す答えも同じであった。それこそが。

「例えこの国が二つになっても」

「私達は一緒に」

二人でそれぞれの手を取り合つての言葉だった。

「何時までもいようね」

「ええ。神の御前までずっと」

そうして最後は神にそれを誓うのだった。共産主義では否定されていた筈の神に対して。

二人は抱き合いこれからのことを誓い合った。抱き合うその姿だけを見ればそれは駅では普通に見られるものだった。しかしそこにある二人が出した答えはそうではなかった。二人にとっては永遠のものであったのである。

分裂 完

2009・5・14

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5715h/>

分裂

2010年10月8日15時04分発行